まびのさと

NO.83 月刊

第五輯 道標篇 第四号

昭和四十年五月一日 発行 （非売品）

岡山県都窪郡吉備町東町一二五 宇垣方 時間 四五七

吉備観光協会

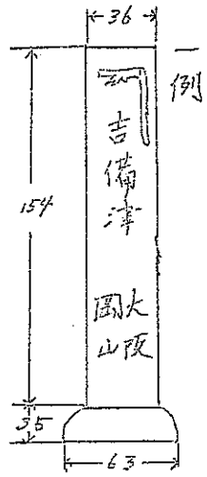
○ 下撫川の道標

一、二十一糎角にして地上高さ八十九糎の花崗岩の石材を用いている。

「右 おかやまみち。左 ゆが こんぴら」と刻んである。これは下宋地内にある。四国道から新町を南へ這入って御手洗に至る三又路の東路傍にたてられている。もと反対側にあったが、道路改修のため無造作にここへ移したものである。もしこの道標にたよって旅行でもしたものなら、とんだ方角違いへいってしまうことになる。せがいらけてこの道を往来するものもあるまい。遺物として保存すべきものか。

二、狭川町の道標は三十六糎角、地上高さ一八九糎、台石を有するもので、吉備町地内では最も大きく刻字も立派にして道標としては代表的のものである。

右（西）「吉備津 大阪 岡山」。正面（北）「金毘羅 ゆか 倉敷 玉島 かさ岡 道」。左面（東）「安政六巳未年 星舎 九月吉祥旦建之 寄附 狭川 吉岡屋左吉 同康右衛門 吉見屋善吉」。裏面（南）「 倉敷 石工 徳松」とある。



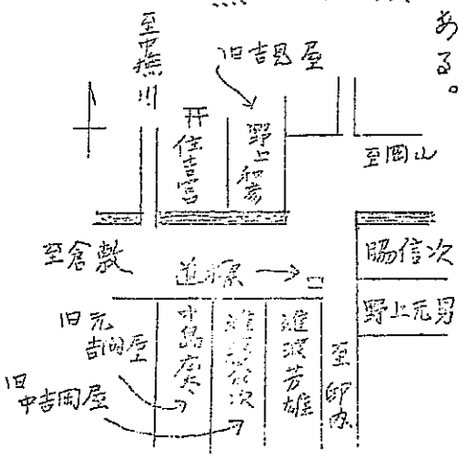
一例

上部に扇子を手に持って、その方向を示している浮彫りが刻んである。標字のなかの、星舎は秋、吉祥旦は日出たき暁とか、朝の異稱である。

この道路は岡山、倉敷へ通ずるものであるが、昭和七年現在の国道二号線が開通せられなかった当時の旧国道である。

△ 吉岡屋は姓を袖岡といい、この道標から西へ、いまの雄渡茶次、中島伝七両家の屋敷がそのあとにして、寛政の頃に袖岡曽右ヱ門の二男新助が分家して中吉岡屋と稱した。

（第七輯人物篇袖岡家系譜参照）



東町（出雲大社の名前）に分家して東吉岡屋と稱した。よって曽右ヱ門直系を元吉岡屋といい、代々が三郎と稱した。その子孫は現在庭瀬の卯西に住し当主は袖岡静夫である。

吉見屋は姓を吉田といい、善吉は袖岡小三郎の二男の六三郎にして吉見屋善吉の養子になったが二代目の善吉である。その屋敷あとは住吉神社の東隣にして、吉岡屋と道を隔て向い合せにあった。いま子孫は神戸市汐見台に住し孫の吉田常夫が当主である。藩政時代は両家とも苗字帯刀を許された撫川での豪商であった。

○ 梶ヶ野の道標

延友の梶ヶ野の樋の傍の草叢のなかに放置してある。これはもと引船橋の北詰に建ててあったものを後世ここに運んだものと思われる。標石の銘に

「右 おか山 道 左 金ぴら 道
左 吉備津 ゆか 安語人 寅（以下不明）」とある。

○ 延友の堰の道標

足守川堤防から庭瀬へ通ずる三叉路で旅という處にある。傍に毘沙門天を浮彫りした石像がたてられている。

「右　にはせ　いなり　道　左　なつかわ　くらしき　道　施主　岡崎増蔵」とある。

この浜は藩政時代の港にして、船路によって上陸した旅人のために建植されたものである。ここには他藩の蔵米の役所が置かれて年貢米を上方に船積みしていた港でもあった。

○　大内田の道標

長さ六十糎、十五糎角の石柱の表面に「左　きびつ　十里半　おか山　二里半」と刻んでいる。この道標は大内田の塚山へのぼる道の左側にある。

荒神宮の踏石に使用されているので、他の三面の文字は不明である。昔早島方面から通づる道が塚山を越えてここで妹尾峠と撫川への分かれ道になっているので、旅人のために建てられた遺物である。人間も年おいて時代に遅れればかかる運命を辿ることであろう。

○　中正院脇の道標

中正院（栄町）門前の路傍にある。地上四十糎、十五糎角の石の表面に「右　備前一宮」「左きびつ　いなり」。と彫ってある。もと反対側の路傍にあったが、西側の民家の一角を切り取り道路を拡げた時、邪魔になるので現位置に移したものである。いまのように道路が整備していない昔を想像することが出来る。建植の年代はわからないが、達筆のあとを見ると、如何なる人の筆跡か、知りたい気持ちになってくるのである。

○　東町の石灯籠

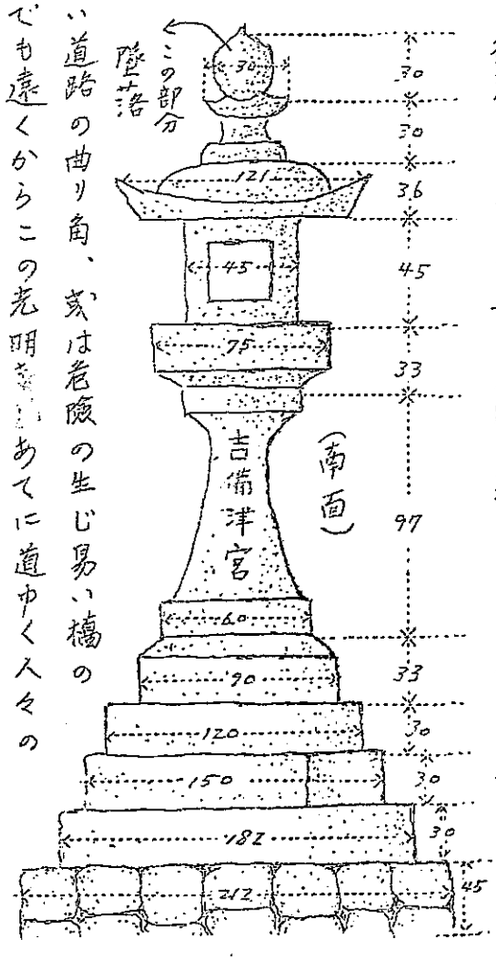
撫川と庭瀬のさかいをなす境目川に架けてある旧国道の撫川寄りの北側橋詰にある。上部の宝珠は先年の地震に川中に墜落し、そのままに放置してあるがこれを現形に復元する時は、地上総丈四四〇糎にもなる大きな石灯籠である。

軸石の三面に

「吉備津宮」「文化二年乙丑九月吉旦」「橋本屋吉兵衛」の銘があり、また四段の台石の上段には「世話人　大黒屋」「栄　講中」と刻んである。

昔は徳川幕府の統制下にあったとはいえ、地方分権的藩制にあった行政の異なる板倉氏支配下の庭瀬領と、戸川氏支配下の撫川領のさかいに建てられているこの石灯籠は、そんなことになにのこだわりもなく往来する人々に善く光明を照らし、不安と不幸を救う崇高な姿に見られるのである。

△　石灯籠に點ずる灯明は最初は信仰の目的で神佛に献ずるものであったが、それが次第に暗夜の道案内をなすことにも兼収るようになってきた。所謂交通安全を保つ役割をもつのである。殆らはしい道路の曲り角、或は危険の生じ易い橋のたもとなどに設けられて暗夜でも遠くからこの光明をあてに道ゆく人々の安全を計ったのである。町内には讃岐の金比羅宮や吉備津宮の銘ある石灯籠が多い。これは信仰者の多いことを立証するものである。



（金毘羅宮は讃岐国にある宮で、祭神は大物主命である。中興になって白峰山に葬ってある崇徳天皇の霊を配祀した。神佛合体以前は金比羅大權現ととなえ、創始については明かでないが佛経にある金毘羅の神といわれる印度の王舎城の守護神をここに祭ったと伝へられている。昔から航海の神として舟人が崇信せられる。また山村などにも盛んにこの神を祭る習慣がある。それは海上は運命を任せての仕事であると同様に山仕事をするにも運命に支配されるので、運命の神として拝め敬ふようになったのである）。

旧幕時代の灯明の取扱方は底の浅い皿に種油を入れ、細い灯芯をこれに浸ため、その先端をすこし皿の縁に出してこれに火打石を使って火を移した。光りは薄く風雨のはげしい日には燈火がきえるなど完全な光りを発したものではなかった。油灯料は大概その部落共同の負担で點灯責任者は輪番制であったが事從の所もあったようである。明治以后政府の文明が急速に取り入られて油灯は全く影をひそめ、石油灯　ガス灯　電灯と次第に進歩発達し設備や取扱も簡單になり、つゝにこの習しはすたれた。現在はただ昔を偲ぶ文化財になってしまった。

○　高田の石灯籠

足守川に架る大橋の下手にある木橋の東詰、提防上にある。軸石の四面に

「金毘羅大権現」「瑜伽大権現」「吉備津宮」「文政十三庚寅年」とあり台石に「当村中」とある。この石灯籠の傍に一基の供養塔がある。高さ七五糎、三十糎角の主石の三面に

表面　「天下和順　下撫川村産　奉納大乗妙典　六十六部　日本回国供養塔　日月清明

願主　六三郎」

左面　「勝願主　備中　道安、同　伊兵工、大阪　勝吉、雲州　勝三郎、世話人同行中」

右面　「弘化五申四月八日　村方世話人　清右エ門、徳十郎、紀三郎、三吉、藤蔵、

勘十郎、岡田屋熊治郎」とある。

村方世話人はいづれもこの村（下撫川村）の人であるが、子孫の家系はわからない。岡田屋熊治郎はいまの高松町宮内の人で、当時宮内で興行を催す時は熊治郎の贊がかからないと、出來なかったという有力な親分であった。この塔をたてた四年后の嘉永五年正月八日他界しているが、年令は不明である。墓は宮内にある。

五

六

この石塔から東へ路を隔ててコンクリート塀を繞らした一郭のなかに四基の石塔がある。

一、牛馬霊神　若宮大明神。　二、無銘塔。　三、地神。　四、日之御崎　鎮座　金刀比羅

いづれも自然石である。

（地神というは我国では古くから民俗信仰の対象で、土地を護る神として崇信される。所によっては地主様とか屋敷の神とも呼んでいる。祭神は天照大御神を始め、食物を守護する倉稲魂命（うがみたまのかみ）稲の種子を伝へる少彦名命、稲をつくることを学ぶ大巳貴命、土壌を受持つ埴安姫命の五神にして、すべてこの神々は土地と農耕に関係があるので農家では單に地神と刻んだ石塔を畦畔にたてて盛んに祭る習慣が、いまに伝わっているのである）。

（瑜伽大権現は児島市の山中にある。金比羅大権現と共に瀬戸内海を隔てて昔から庶民の信仰を受け、必ず両社に詣づる習慣があった。もし一方のみに詣づるものは一片まいりといって嫌悪されたものであるが、明治維新の改革で金比羅は神社に改めたが、瑜伽は由加神社と蓮台寺に分離した結果、次第に信仰を失い衰微した。それに交通の不便も原因のようである）。

○　大橋両側の石灯籠

足守川大橋の東と西に石灯籠がある。東詰のものには軸石に

「金比羅大権現」「光華明彩」「慶應四戊辰歳春　光勝日建焉」とある。また台石に

「寄附講中　袖岡新助、同左五郎　同小三郎　太田新助　児島屋宗兵衛　吉見屋善吉　吉

岡屋条治郎　同兼右衛門　瀬口屋静三郎　児島屋庄吉　万屋文治郎　繁屋文助

世話人　万屋文治郎　鳥羽屋重兵衛

貝光庵　特位　吉見屋善次郎　土佐屋条吉　川入屋仲蔵　同善吉　瀬口屋平三郎

鳥羽屋重兵衛　万屋庄兵衛　館屋喜助　嶋屋吉蔵」と刻んでいる。

足守川大橋西詰にある石灯籠

来詰の石灯籠と同質（御影石）同形であるが、建設は十八年後の明治十九年にして、吉備町地内では最も新しいものである。五段の台石を有する総丈四七〇糎の大灯籠である。明治末期の地震に倒壊したが、大正五年に笘志者の手で再建した。頂に火袋と笠石に損傷の跡がみられる。軸石に「吉備津神社」「金毘羅宮」「氏神両社」「明治十九丙戌年第一月建之　大正五丙辰年第三月再建」、と四面に彫っている。（再建の年月は後から刻み込んだものである）。台石の南面には

二段目　燈籠講加入連名　壹口持　雉波常造　雉波徳三郎　雉波新吉　雉波伊三郎
雉波吟造　次田武吉　島村平太郎　雉波藤作　雉波定五郎　曽我彦太郎
町内北西　発起人　雉波吟蔵　雉波菊次郎　雉波嘉平
燈籠加入連名　半口持　小御吉造　高島増右エ門　雉波菊治郎　雉波文作

三段目　雉波三治郎　次田直造　坪井吾八　平川源吉　雉波萬治郎　平川多吉　曽我宗吉
雉波利平
同　四半口持　荒木甚五郎　木元愛介　熊代直造　児島忠吉　岡　藤十郎
雉波平吉　雉波栄一郎　荒木千代造

四段目　四半口持　曽我五郎　児島源太郎　雉波常治郎　大江年治

以上は建立の時の寄附者名であるが、壹口の出資額がいくらであったか記録がないので（不明。）

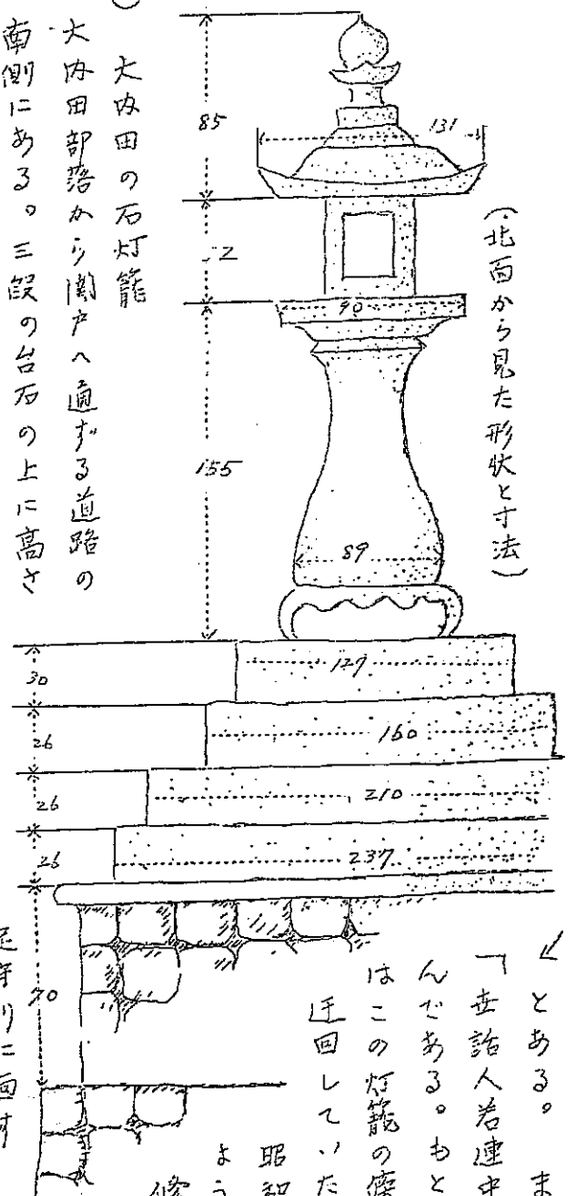
台石の南面には再建の時の寄附者名が新しく刻んでいる。

一段目　発起人　雉波常造　雉波伊三郎　雉波徳三郎　雉波吟造　石燈籠再建記（勅）

二段目　世話人　雉波常吉　雉波静夫　次田直蔵　島村善次　佐藤常三郎　雉波寛治
坪井源次郎　児島精太郎　高島惣吉　木元安吉　岡　藤十郎　小御卯一郎

三段目　中野小十郎　児島源三郎　児島丹蔵
寄附者連名　一金五十円　雉波吟蔵。一金参拾円　雉波菊次郎　雉波嘉平
雉波静男　雉波常吉。一金拾円　次田利右エ門　島村善治。一金拾円　佐藤常
三郎　雉波寛治　児島忠吉　坪井源二郎　高島惣吉　井上次郎吉。一金五円
曽我義雄　中野小十郎　岡　藤十郎　平松久一郎　小御宮十郎　西　茂次郎
熊代繁雄　佐々木恒夫　木元安吉。

四段目　一金五円　雉波近治　柴田品松。大正五年三月　石工井上次郎吉　柴田品松



（北面から見た形状と寸法）

とある。また台石の上段に「世話人若連中」「村中」と刻んでいる。もと関戸へ至る街道はこの灯籠の傍から南の山裾を迂回していた細道であったが昭和九年の頃に今のように直線に変更改修されたのである。昔はこの灯籠に毎夜火を点じて交通の安全に備えて、往来の人々に親しまれたことであろう。軸石に刻まれている八幡宮は田大体田村の氏神である。

○　大内田の石灯籠

大内田部落から関戸へ通ずる道路の南側にある。三段の台石の上に高さ一二〇糎の灯籠である。軸石の四面に「吉備津宮」「金毘羅大権現」「八幡宮」「天保十五辰巳四月建之」↘

○ 邸内の石灯籠

旧庭瀬藩館邸内に鎮座する板倉氏の祖、板倉重昌とその子重矩を祭る清山神社の社頭にある。高さ一八〇糎にして軸石に「永代常夜灯」「明治八辛卯年五月末日」と刻んでいる。廢藩後旧家臣たちが主君の恩顧をしのび寄進したものである。

○ 観音堂の石灯籠

松林寺の前の路を東に曲って小川に沿うて観音堂へ出る三叉路の突き当りに一基の灯籠がある。三段の台石の上段に「講中」と刻み、軸石の正面に「妙見宮」。右面に「天保十亥年六月吉日」。左面に「正八幡宮」とある。妙見宮は西手野の了性寺の鎮守で、正八幡宮とは八幡山の八幡神社にして講中のものが奉納したものである。

○ 栄町地神宮の石塔

栄町筋を東へいった栄町の突き当りに二基の祠がある。九一糎四方の流造本瓦葺屋根にして丸瓦には左廻り三巴に縁を取ったものを使っている。その境内に左の三基の石塔がある。

一、「荒神宮　正八幡宮」　裏面に「風呂屋口中」と刻んだ豊島石にして、台石とも地上高さ一二〇糎、笠石を置いた二四糎角のものである。もと完全な灯籠であったが、火袋の部分を破損して笠石のみを載せたのである。

二、「秋葉神社　火御崎神社」と刻んだ花崗岩の無縫塔にして、地上高さ九一糎ある。

三、「牛神」　左面に「明治十二年卯旧八月建之」と刻んだ無縫塔にして台石とも地上高さ一二〇糎ある。

拝殿はいま栄町の公会堂に使用されているが、もと幣殿を有する建物であったが朽壊したので現在の如く吾妻屋造りに建替えたのである。正面の左右に石灯籠があったが裏に移

されている。軸石に「献灯」「天保四癸巳八月」とあるは、いまの大熊道彦宅のあたりの旧名にして、明治廿四年二月に町制改革によって栄町になったのである。

○ 備前、備中の境界石

備前、備中の境界線は吉備の中山の峯つづきを南北に走り、南部は田圃を一直線に流れる用水路によって家は岡山市の白石、久米に隣りして足守川に至っている。この用水路は岡山さかいとするために堀られたので境目川と呼んでいる。この流れが足守川に注ぐ畔に汐止の梶ケ野の樋門が設けられている。ここから提防を少しいくと足守川に設けてある引舟樋がある。対岸が福田村である。樋門の東寄に境界標の石柱が一本ある。これから境目川を越って旧国道の石橋までの間に点々と建植されている。これは藩政時代に領域を明かに示し将来紛争を防止する目的でたてられたのである。現在残存するものは三、四ケ所に過ぎず延友李村にあるものは水上高さ五十糎、十五糎角の石標で「従是東備前領」。「従是西備中領」と刻んだ二基が背合せに建てられている。備前のものは少し上手に筋違いにあって川底深く打込んでいる。備前領の石材は備中領のものに比べて文字は浅彫りであり、また石面の磨きも粗末にみえる。

（おわり）この項求完

醤油 とろ
三上
吉備町・下撫川
栗原仙太郎商店
吉備局電一七一・有線九一〇九

土木建設・ホーリング部
有限会社 所司組
取締役社長 所司利男
吉備町下撫川・吉備局電二九・三〇番